

平成25年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成25年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ハタハタ

学名 *Arctoscopus japonicus*

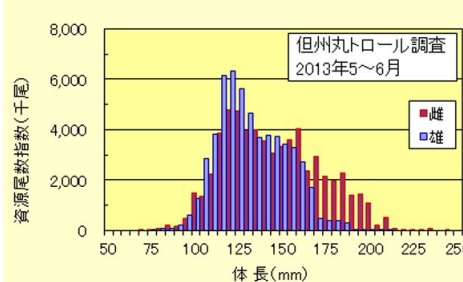
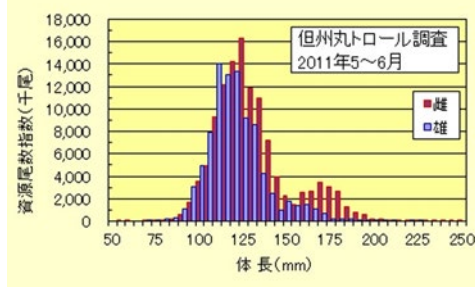
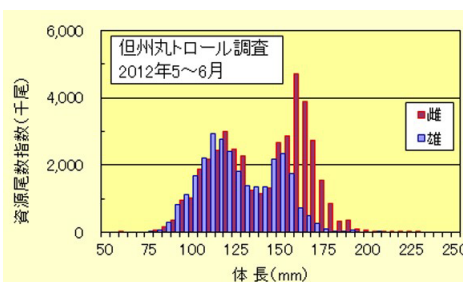
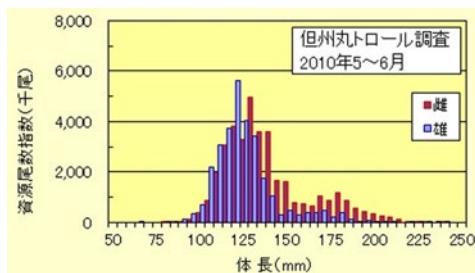
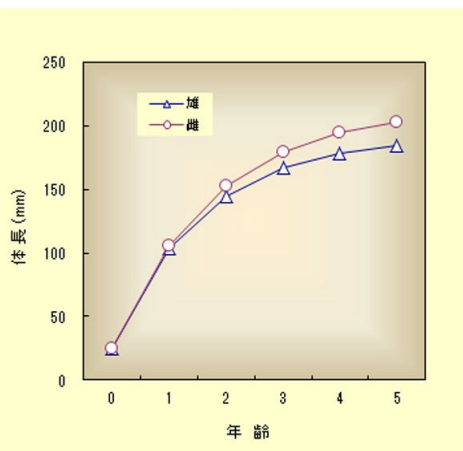
系群名 日本海西部系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 5歳(年齢は、ふ化した年を基準に暦年で示す)
成熟開始年齢: 雄:1歳(100%)、雌:2歳(100%)
産卵期・産卵場: 12月の極短い一時期、沿岸の藻場、能登半島以西にはまとまった産卵場がない
索餌期・索餌場: 未成魚期以降の分布と回遊に関する知見は少ない
食性: 端脚類、橈脚類、オキアミ類、イカ類、魚類
捕食者: 大型魚類によって捕食されるが、詳細は不明

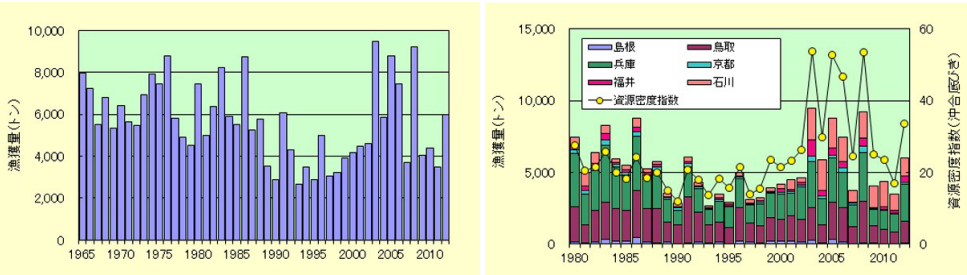


漁業の特徴

兵庫県と鳥取県では沖合底びき網(1そうびき)、京都府以北および島根県では小型底びき網によって主に漁獲され、兵庫県と鳥取県および石川県の水揚げが多い。漁期の中心は底びき網のカニ漁終了後の3～5月である。休漁期の9～10月にも漁獲はあるものの春よりも少なく、11～1月はほぼ漁獲されていない。

漁獲の動向

日本海西部のハタハタの漁獲は、過去50年間、数年での変動を伴いつつ長期的にも変動してきた。漁獲が急増した2003年以降も、半減・倍増は繰り返し、多い年は9,000トン前後、少ない年は4,000トン前後を示している。2009年から3年間は少なく4,000トン前後を示し、2012年は増加したが5,980トンであった。近年、少ない年となる頻度が高くなってきたと推察される。



資源評価法

日本海西部における漁獲量の過去 50 年の推移から、長期的資源変動ならびに資源水準を判断した。ズワイガニ等底魚類現存量調査（以下、トロール調査と呼ぶ）を 5～6 月に実施し、調査結果に基づき推定した資源量から資源動向を判断するとともに、2004 年以降の漁獲割合と F 値などを把握した。

資源状態

2009～2011 年の漁獲量は少ない年であり、いずれも 4,000 トン前後であった。2012 年は、5,980 トンとなり、漁獲量が増加した 2003 年以降の平均値とほぼ同じであった。2009～2012 年の平均は 4,470 トンであり、高～中位の基準を下回っており、水準は中位と判断した。動向については、トロール調査結果に基づく資源量の 2009～2013 年の推移より判断した。資源量は、2011 年に増加したが、その前後の 2009 年や 2012 年と 2013 年は平均的な値であったことから、動向は横ばいと判断した。

動向

水準

→ 横ばい

→ 中位

→ 低位

→ 高位

管理方策

2009～2012 年の平均漁獲量は 5,000 トンを下回ったことから水準は中位と判断した。トロール調査に基づく資源量の推移から動向は横ばいと判断した。再生産成功率を 2005 年以降の中央値(RPSmed)とした将来予測では、現状の漁獲圧で資源量と親魚量は現状を維持することが可能である。現状よりも漁獲圧が高まることのないようにしながら、資源を効率的に利用することが重要である。ABC 算定は、規則の 1-3)-(2)に基づき行った。Flimit は、基準値を Fcurrent とし、 β_1 を 1.0 とした。そして、不確実性を考慮して 0.8 を乗じた値を Ftarget とした。

	2014 年漁獲量	管理基準	F 値	漁獲割合
ABClimit	49 百トン	Fcurrent・1.0	0.24	22%
ABCtarget	40 百トン	0.8・Fcurrent・1.0	0.20	18%

ABC の値は十の位を四捨五入したもの

- 資源評価のまとめ**
- 漁獲量では、2009～2011 年は 5,000 トンを下回り、2012 年は増加したが 5,980 トンであった
 - 漁獲量の直近 4 年平均は 5,000 トンを下回っており、中位水準
 - トロール調査に基づく資源量は、2011 年に増加したがすぐに減少し、動向は横ばい
- 管理方策のまとめ**
- 現状の漁獲圧で、資源量と親魚量は現状維持することが可能
 - 現状の漁獲よりも高まることのないようにしながら資源を有効利用するべき
 - 網目拡大等の自主規制等の措置を呼びかけ、1 歳魚の保護に努め、2 歳魚主体に利用することが肝要

執筆者：藤原邦浩・上田祐司・松倉隆一・山本岳夫・山田達哉

資源評価は毎年更新されます。